

MACF 礼拝説教要旨

2024年4月14日

「成熟を目指そう」

ヘブライ人への手紙 5章 11-6章 2節

このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません。

12 実際、あなたがたは今ではもう教師となっているはずなのに、再びだれかに神の言葉の初歩を教えてもらわねばならず、また、固い食物の代わりに、乳を必要とする始末だからです。

13 乳を飲んでいる者はだれでも、幼子ですから、義の言葉を理解できません。

14 固い食物は、善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人のためのものです。

* 6章

1-2 だからわたしたちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。

* *

前の節のところでは「永遠の大祭司キリスト」が語られ、そこには完全な大祭司としての役目を果たし切ったキリストが描かれていました。それは「他者を神と結ぶ役割を果たしたキリスト」の姿でありそのことのために苦悩し、叫び、泣き、痛みを耐えるキリストが書かれていました。

今日の箇所は、その犠牲によって新しい神様との関係の中に生きるわたたちが、どうあるべきなのかが教えられています。「成熟」が鍵の言葉かもしれません。

キリストを信頼すること、キリストの真似をすることは、ちょうど親を信頼し、親の真似をしながら大きくなる子供に似ています。

乳幼児はまだミルクを飲まされ、離乳食がやっとです。この時代の意識は自分のことだけ、そして見るもの聞くものが新鮮でどんどん真似ができるし、吸収できます。

でもヘブライ人への手紙の記者は、それは霊的な赤ちゃんだということです。

自分にとってのイエス様、自分にとっての聖書の言葉を探究し、満足するのはおさなごだということです。

成熟を目指すというのはどういうことなのでしょう。

ヒントがいくつか書かれています。

- 1) 義の言葉を理解する
- 2) 善悪を見分ける感覚を養う
- 3) キリストの教えの初歩を離れて

1) 「義の言葉を理解する」

口語訳では「13 すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。」

ERV 訳では

13 赤ちゃんの様にミルクを与えられてそれをそのまま飲んでいる人たちというのは、自分で何が正しい生き方なのか理解することはできないだろう。

自分の中にしっかりとした「軸」としての神様の考えが育っていないので判断ができにくく、結局他人の意見ばかりを意識することになっていないでしょうか。

2) 経験を通して

14 そして固形物の食事は成長している者に与えられる。

彼らは彼らの経験を通して学び、正しい事と間違っている事との区別をつけ、見分けることが出来るのです。でも、教会の外での生活の中でそれらが養われ経験として身につけていかないと、どうしても仲間内だけに通用する常識に縛られてしまうことになるでしょう。

3)キリストの教えの初歩を離れて

悔い改め、信仰、聖書の重要性、教会への出席・献金・奉仕・伝道宣伝活動・交わりと呼ばれる仲間内の会合など

これらは初歩的な内容であり、小さな家庭内での出来事と似ているかもしれないですね。

そしていつの間にかそれを「律法化」して、それを守ることだけに一生懸命になってしまう傾向はないでしょうか。もちろん、なにひとつ無駄なことはないし、それを丁寧に経験することは大事ではあるのですが。

自分の足で立つというか、自律的な感覚で「人のせいにせず、自分のなかでキリストの心を土台に生きる姿勢を育てる」必要があります。

それは子育ての意識や子供の巣立ちの出来事と似ているかもしれません。

子育て 4 訓

乳児はしっかり肌を離すな

幼児は肌を離せ、手を離すな

少年は手を離せ、目を離すな

青年は目を離せ、心を離すな

親が子供の自立を喜び、手放せるのは

* 子供が学習や経験などを通して「生きる力」を身につけるから

* 子供が親以外の頼れる誰か(先生、恋人、友達、同僚など)を見つかるからでしょう。

* もしかしたら教会は、わたしたちをまとめ、縛り、不自由にし

大人への自立を妨げてこなかったでしょうか？
帰ってくる場所としての家庭、帰ってくる場所としての礼拝があることは

嬉しいことです。しかし、教会内の活動に忙殺され、社会で花開く場所を

考えることもないとしたら、それは幼児性に通じていて、子供の自立を阻むものになってしまっていないでしょうか。

礼拝は心を神と友らと結び合い、賛美といのりとみ言葉で心を整える基地のようなものと考えられることができるかもしれません。

それは状況によっては、数人の仲間たちとの関わりの中でも形成できるし、心の繋がりを意識することができれば、しばらく会えなくても絆が切れることはありません。

大胆にキリスト教徒・クリスチャンという名前を外しても良いから誠実に明るく優しく職場の中で、教会の枠の外で生きることによって本気になる時期がきていないでしょうか。

建物がなくなっても、リーダーがいなくなっても、互いがケアしあいながら大人になり、小さな集まりのなかに心の安心を経験しながら社会の中で精一杯生きること、そこに人生の醍醐味があるのかもしれないですね。

そこにこそ「成熟」した存在としてのあなたの姿があるように思います。

MACF の礼拝映像は

<https://youtu.be/OICSD1VXOQ>